

## 遺構（歴史、背景について）

池田家（いけだや）は1828年に三俣（みつまた）で創業し、3軒ある脇本陣のうちの1軒として、主要な宿（本陣）が埋まっていた場合に大名などの身分の高い人物が宿泊する場所として利用された。また、大名などの客がいない場合は、商人などの旅行者向けの宿泊施設としての役割も果たしていた。現在の所有者は、「西国将軍」として知られた有力大名・池田輝政（いけだてるまさ）（1565～1613）の子孫である。高官向けに用意された部屋では、揚羽蝶をあしらった独創的な池田家の家紋を見ることができる。

江戸時代（1603～1868）、池田一家は米や織物などの商品の問屋兼運送業者であったため、この辺りの道は荷車と馬が通行できるように拡張された。また一家は、町にいる4人の名主（地域の取り締まりと徴税を行う責任者）の1人としての地位も代々占めていた。宿駅制度が1872年に廃止されたあと、池田家は旅館（伝統様式の宿）となった。

現在の建物は1829年に建てられたもので、1848年の大火、1868年の戊辰戦争、そして1919年の雪崩の難を免れてきた。三国（みくに）街道で唯一今も残っているこの建物はかつて大名をもてなす施設として提供され、大名が訪れた際は左手にある専用の入口が使用されていたと考えられている。元々の屋根は石置木羽葺き（いしおきこばぶき）したものだ。